



<N0180>

フジキ (藤木)

毎年この時期になると気をもむことがある。今年は咲くだろうか。少しは咲いて欲しいのだが・・・と。フジキは毎年観察を続けていると開花状況が年によって大きく異なり、枝もたわわに咲く年もあれば、まったく花を見ない年もあるためだ。

名前はフジに似た花をつける木の意味だが、フジはつる植物で花穂は垂れ下がるが、フジキは高木になり花穂は上を向いている。また、花以外に注目すると葉が左右対称の複葉ではなく小葉が互生していて他に例を見ない珍しい特徴である。観察してみたい。

マメ科の落葉高木。やや標高の高い山中の沢沿いなどに自生している。



<N0181>

ムシトリナデシコ（虫取撫子）

ムシトリナデシコには葉の下の茎に粘液を分泌する茶色い部分が茎を取り巻いている。ここに小さな虫が付着して捕らえられているのを見ることがある。名前の所以である。

ところが観察を続けても、食虫植物のように虫のからだから栄養を搾取するような様子はない。何のために粘液で虫を捕らえているのだろうか。

チョウやアブなどは花から花へ飛び回り受粉に関わって花を訪れることが期待されても、地上と花を行き来するだけのアリには受粉は期待できない。花の蜜を吸うだけで受粉に関わらない。粘液はアリが茎を登って花に達するのを妨げるためのバリアの様なものではないのだろうか。

ヨーロッパ原産の外来植物。江戸時代に観賞用として移入したものが野生化したと言われている。ナデシコ科の越年草。